The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	サンフランシスコからの遠隔講義 : 早期留学のすすめ
Author(s)	久保井, 亮一; 松山, 明江; 南, さやか 他
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2012, 8, p. 41-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4107
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学大学教育実践センター紀要』第8号（2011），pp.41-44

【教育実践レポート】

サンフランシスコからの遠隔講義

― 早期留学のすすめ ―

大阪大学サンフランシスコ教育研究センター
久保井　亮一・松山　明江・南　さやか
大阪大学教育実践センター
岩居　弘樹・松河 秀哉

Report of Osaka University Distance-Learning Program from San Francisco

Ryoichi KUBOI, Akie MATSUYAMA, Sayaka MINAMI, Hiroki IWAI, Hideya MATSUKAWA

With two semesters of running Distance-Learning classes, the Osaka University San Francisco Center for Education and Research and Institute for Higher Education Research and Practice have been offering opportunities to learn in depth of liberal arts and to question students themselves "What are you?" toward Globalized World. With the aim of "Comprehensive Understanding" and building "Transcultural Communicability", this course also provides discipline of "Critical Thinking" as well. Toward this, we have invited Consul General, a cross-section of internationally experienced professors, officials, business experts from a variety of fields to talk about their experiences and topics related to their researches. Through 8 years of the programs, they have been ever successful and we have aimed at continuing to develop further pedagogies toward the intensive series of Distance-Learning.

Key Words: What are you?, Critical Thinking, Perspectives toward Globalized World

はじめに

大阪大学サンフランシスコセンターは、2004年4月に設置された。当初は、COEやTLOの支援などを展開する研究を中心とする拠点であったが、よりグローバルな活動を展開する拠点として、2006年から「教育研究センター」と位置づけられている。現在は特に大学本来の使命として基盤教育に重点を置いた活動が成されていることを強調したい。大学教育実践センターの協力のもと、設立の翌年2005年からカリフォルニア州にある日本の大学海外拠点としては他に先駆けて遠隔講義の配信運営を開始している。2011年までの現在、受講生の中から海外短期研修や海外留学へ挑戦する学生も出てきている。

2. 基盤教育の重要性と遠隔講義の役割

「大学」の使命の一つは、「知を創造」し、「知を伝達」し、世界に「知を発信」できるグローバルな人材を育成し輩出することにある。最先端研究情報や知財の交換だけでなく、国際化がKey Wordの現代、グローバル人材の基盤教育にも重点を置かねばならない。すなわち、本学の目標でもある教養力と専門分野における考察力・構想力の向上、そして異文化の壁を越えて情報と意思の交換を行うグローバルコミュニケーション能力の向上が、重要な課題となる。「人間力の向上」や「リーダーシップ力（指導能力）」は、人と人との交流の中でこそ磨かれると考える。自立して考える力、Logical（論理的）な構成力と表現力を磨くことである。全ての領域で世界がグローバル化しており、文化、言語の違いを越えて交流できる思考力、洞察力、実行力がますます求められる

時代の中で、"What are you?"（あなたは何者か？）と自分に問いかけ、"What are you doing for others"（世のため人のために何をするのか？）と問うことが、学問を学ぶ根底にあり、常に自らに問いかけることによって社会と関わり、「国際的」な視野で物事を考える基盤となる。英語での表現は、日本語より単純であっても、常にLogicalな表現が求められる。日本人の多くが英作文に苦手意識を持つのは、日本語での「曖昧」な表現に慣れてきたからである。先ず求められる英語力は、簡潔さと論旨の明瞭さである。「外国語」を理解することではなく、正確に伝達する能力を問われている。情報伝達手段としての英語が不可欠なのである。後期の遠隔講義は全ての授業が英語で行われ、受講学生は「LogicalでCritical（批判的）な（英語的な）思考」で物事を考えることが求められる。前期・後期を通して、異文化社会での様々な考え方や「情報」を得て視野を広げ、自分の考えを構築し、受講生全員が「英語的思考」で自分自身を見つめなおし、グローバルな視点で社会を捉えることができる能力を養うことを最終目的としている。"What are you doing for others"（世のため人のために何をするのか？）をこれからの高等教育過程で問い続けてほしいという願い（適塾の目標）がこの講義シリーズに込められている。

3. 2005年－2011年までの遠隔講義

サンフランシスコからの遠隔講義は初代センター長（室岡義勝名誉教授・生物工学）の下で開始され、2011年度で7年目を迎えた。前期は「世界は今―サンフランシスコから」と題し、全学部の1年生を対象として、金曜日1限目に豊中キャンパスに配信されている。本講義の目的の一つは、早期留学のすすめ（視野を広げ、自立心を養うこと）である。世界の経済・科学技術の最も動きの激しい、米国カリフォルニアのシリコンバレーとベイエリア（サンフランシスコ湾周辺地域、南北150km、東西100kmの範囲を指す）を中心に活動する日本人先輩の経験を伝え、国際社会に貢献しようとするチャレンジ精神と根本的な勉学の在り方を学ぶ契機とすることをめざす。講師陣は外交官、ベンチャー企業・有名企業社長、弁護士、先端分野の科学技術者など多岐にわたる。これを講義順（2011年前期及び後期例）に示すと次のとおりである。

①「外交実話」（猪俣弘司　在サンフランシスコ日本国総領事館総領事）
②「私の留学経験：ステーキとお寿司」（松浦功Bank of The West取締役顧問）
③「言葉の不思議」（中川淳子　北加日本商工会議所事務局長・前SFラジオ毎日・北米毎日新聞社前社長）
④「新天地の醍醐味―ベンチャー企業を起こして」（桝本博之B-Bridge International Inc.社長）
⑤「トランスレーショナルリサーチ：基盤研究から臨床までのローテクとハイテクの相補技術」（西山俊彦、Center for the Advancement of Health and Biosciences, Director）
⑥「6次のへだたり」（片山誠　Innovation Core SEI, Inc.社長）
⑦「世界の中の大阪、アメリカと大阪」（佐古里子　大阪市シカゴ事務所所長）
⑦「DISAPPERING JAPAN?-SAVING JAPAN'S IMAGE FROM THE GRASSROOTS UP」（Dana Lewis, Japan Society of Northern California, President）
⑧「萌えるアメリカーマンガとアニメ」（堀淵清治　NEW PEOPLE, Inc.創始者・会長）
⑨「What are you?　ストレスとアフォーダンス～早期海外留学の勧め」（久保井亮一　大阪大学サンフランシスコ教育研究センター長）
⑩「What are you? ～早期留学の勧め」（松山明江　大阪大学サンフランシスコ教育研究センター　プロジェクトコーディネーター）

後期は「学問のすすめ－米国の大学キャンパスから」（Academic World-Insights from American Universities）と題し、世界トップランキングの大学（阪大との交流協定校を中心）の講義を英語で配信している。ここでは学問や研究の面白さと「英語的思考」を訓練し、論理的また批判的思考を身につけてることを目的としている。2011年度は、以下のような講義を行った。

①「DISAPPEARING?-SAVING JAPAN'S IMAGE FROM THE GRASSROOTS UP」（Dana Lewis/Japan Society of Northern California）
②「Has Human Activity Outstripped the Environments Ability to Rid Itself of Fecal Bacteria?」（Michael Sadowsky/ミネソタ大学）
③「Online Wine Tourism Strategies」（Roblyn Simeon/San Francisco State University）
④「Communication in the Global Society and Improving English Skills」「筒井道雄/ワシントン大学）
⑤「The Political Economy」（Steven Vogel/カリフォ

ルニア州立大学バークレー校）

⑥「Introduction to Dental Caries」（Grant Tsuji/カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校）

⑦「Why Japanese Citizens Need to Participate in Trials?」（福来寛/カリフォルニア州立大学サンタクルーズ校）

⑧「New Technology & Sports」（John Ino/カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校）

⑨「What are you? Stress and Affordance?」「Critical Thinking」（久保井亮一 大阪大学サンフランシスコ教育研究センター長）

⑩「Critical Thinking/Academic Writing」（松山明江 大阪大学サンフランシスコ教育研究センター プロジェクトコーディネーター）他。

4. 遠隔講義実施における問題点、改善点

2004年実施開始当時から前期遠隔講義登録者数は年々増えており2011年度は220名が履修した。しかし2006年度から開始した後期遠隔講義は全ての授業が英語で行われ、毎回講師の講義内容が異なるため、かなりの予習・復習が必要となる。また日本人講師ぞれぞれの体験談を聴講する前期遠隔講義と比べ、後期遠隔講義は入門であっても学術的知識、思考を求められる。英語での90分の講義を受講した後、「講義から何を得たのか」が学生にわかりにくいため、出席学生数が減るという現象が起こり続けた。特に2006-2008年の遠隔講義はその現象が顕著であった。そこで後期遠隔講義の目的と趣旨を再検討、再構築することを2010年度に行なった。教養科目である本遠隔講義はリベラルアーツの重要性を浸透させ、「学問」をする上での基盤となるCritical Thinking（批判的思考）を身につけ考えてもらうことにあることを全授業の趣旨として、徹底した。また講師陣の入れ替えも同時に行った。理系講師陣（Science/Engineering）が多かったためこれを減らし、その代わり文系講師（Humanities）を増やすことで文理のバランスを図った。授業開始のオリエンテーションにて“Critical Thinking”とは何かをビデオ等も活用して解説し、英語の文献資料の読み方、英語での講義の受講の仕方を指導している。翻訳するのではなく直接英語的に考えるCritical Mind（批判的知性）を養わせることが後期授業を通じての共通の目標であることを明示した。それに伴い、各講師に対しても趣旨について具体的な説明、協議を行った。それによりオムニバス形式の講義であっても、受講学生が12回の講義を通して、Critical Thinking能力を培えるよう努力した。学期末には「来学期受講する各講義をより論理的、批判的思考で考える」自立した姿勢（アプローチ）を身につけることができる。

また90分の講義の中にグループ内での講義内容の確認や質疑応答の時間を設け理解度を高められるようにした。その結果、2010年度以降学生の授業出席率、レポート提出率が上がるだけでなく、学生の講義に対するモチベーションが大きく改善した。

5. 遠隔講義における教育効果

遠隔講義スタイルを改善する過程で、最も効果が現れたのは、「文系・理系混合型の小グループ分け」である。授業初回オリエンテーションにてコーディネーターがグループ分けを行い、各グループ内で自己紹介を行うことでお互いの連帯感を持たせる。日本の学生は授業内での質問や発言に消極的であり、英語での質問を課することはむずかしい。しかしグループ内でディスカッションを行い、質問を個人のみでなくグループとしても行うことで各学生個人の負担が解消されると同時に、全学生が授業への積極的関与が促される。この「文系・理系混合型小グループ分け」を導入した2009年度以降、低迷していた学生の講義出席率及び授業への参加姿勢に大きな改善が見られた。また、グループの中に留学生や海外生活経験者を分散配置したことも良い効果をもたらした。さらに後期の中間点、最終回でもアンケートをとることでCritical Thinking改善のフィードバックに利用している。

授業後のレポート（A4 1ページ程度）は授業の内容に基づいて各講師が指定するトピックについて書くことになっている。授業を復習する意味においては効果があるのだが、英語力の低い学生は英語の間違いの訂正を受ける機会がなくレポートを毎回提出してもレポートの書き方を改善する機会がない、また英語力が低いため熱心に授業に参加していてもレポートの評価が低くなり良い成績をもらえないなどの不公平さがある。TAによる英文指導導入や課題レポートのあり方、授業成績評価の出し方についても検討が必要である。また前期遠隔講義と後期遠隔講義の関連性についても学生に見える形で提示していくことも重要であろう。実際2011年度前期遠隔講義を受講した学生の中には、授業から学んだ「海外に飛び出す重要性」を実践するため大阪大学が実施する

北米での夏季語学研修に参加した者もいた。また、キャリア形成のため、単身でシリコンバレーを視察に渡米した学生が2名いた。また夏季語学研修を経て、後期遠隔講義を受講した学生が3名でたことから、学生の向上心を持続させ、繋げる目的でも、また前期遠隔講義から得た視野を広げるため海外短期研修も体験する、その後後期遠隔講義に臨むという選択肢を学生に提示していきたい。あわせて、「大阪大学未来基金」を通じての奨学金提供等も検討が必要である。

6. 遠隔講義運営に関わる問題について

運営に関わる問題は日米双方の「担当教員チーム」と「設備」と、両チーム間の緊密なコミュニケーションである。講師が授業を行うサンフランシスコセンターでは担当教員1名、授業補佐1名が準備及び授業進行を補佐し、学生が受講する教室側ではコーディネーター1名、技術担当教員1名、TA1名授業運営にあたっている。また遠隔講義用装置設置・更新に伴うコストもかかるため、今後の遠隔講義運営には人員と予算確保を含めた検討が必要である。また各講師依頼、講師陣とのコミュニケーションを図り、実際の授業にて双方向型の授業を提供できるように、講師－担当者間、サンフランシスコセンターチーム－大学教育実践センターチーム間の緊密なコミュニケーションが不可欠である。

7　今後の展開について

2011年2月には短期集中講義（2012年2月15日－2012年2月18日）「世界の事情を英語で学ぶ－中級編」実施を予定している。講師はカリフォルニア州立大学サンフランシスコ校　John Ino教授、カリフォルニア州立大学サンタクルーズ校福来寛教授が担当する。この講義は後期の遠隔講義で学んできたCritical Thinkingの実践編と位置づけられている。文系・理系のそれぞれの分野での、Controversial Issues（論争的課題）を取り上げて、色々な立場を紹介した上で小グループに分かれての議論し、その結果をプレゼンテーションしたり、またはグループ間で議論する演習型の授業を予定している。将来的には大学院生向けの遠隔講義提供も視野に入れたプログラムの拡張を模索している。

終わりに

今回の報告は、2010－2011年度に焦点を絞っているが、この遠隔講義の成果は、多くの講師の方々の努力や大学教育実践センターのサポートのもとでサンフランシスコ教育研究センターが創設以来7年をかけて築き上げてきたものである。「国際教育」「国際教養」とは何か、原点を問い、大学としての使命である世界に貢献していく次世代の「人材育成」に向けて今後も努力して参りたい。

参考資料：

1) 室岡義勝：遠隔講義「世界は今－サンフランシスコから」、「生産と技術」第58巻第4号、pp1-3, 2006
2) 谷本親伯、一木朋子、松山明江：「サンフランシスコは激動中」、「生産と技術」第59巻第4号、pp3-4, 2007
3) 岩居弘樹：「サンフランシスコからの遠隔授業」、大阪大学大学教育実践センター紀要第5号、pp59-62, 2008
4) 久保井亮一：「大阪大学サンフランシスコ教育研究センター便り－「咸臨丸太平洋横断150周年と早期留学の薦め(2)」、「生産と技術」第63巻第1号、pp92-95, 2010